

「 守りたいものを、最大限守るために 」

千葉県 千葉県立東葛飾中学校 3年 有田 陽彩

1,514件。これが何を意味するか皆さんは知っているだろうか。1年に起きる殺人事件は約900件。その1.5倍近く日本で起きていること、それは土砂災害だ。しかもこの数字は過去最大。単純計算で1日5件起きていることになる。土砂災害は起きて当たり前だということは最早明白な事実だということが分かっただろう。しかし、なぜ人々はその「当たり前」に気付かず、あるいはそれを忘れてしまうのだろうか。

先日、西日本を豪雨が襲った。すさまじい雨に伴う土石流、崖崩れ、地すべりによって132人もの人が亡くなった。僕の生まれた岡山県も被害に遭い、僕たち家族は不安気にテレビを見ていた。幸いにして住んでいた町が大きな被害に見舞われることはなかったが、テレビには甚大な被害を受けた西日本の姿が映し出されていた。真っ二つになり押し流された家、逆さまになり地面に突き刺さった車、丸ごと崩れ落ちた収穫前の果樹園・・・怪獣にでも襲われたのではないかと思う程の惨状だった。しかし、被害とは物的なものだけではない。家を失って避難所にいる人の

「本当にこれからどうすればいいのか分からない」という声が耳に残っている。大切な人を失った人もたくさんいるだろう。そういった意味でも、今回の被害の大きさは計り知れない。しかしそこから目を背けてはならない。どうすれば私達の財産、そして何よりも命を守るのか、「いざという時」が来る前に我々はよく考えておく必要があると思う。

実は、僕の祖父母の家の裏山が台風で崩れかけ、祖父母一家は怖い思いをしたという。

「結局、正しく対処するのが一番なのよ。」

祖母は帰省した時にこう語った。この場合の正しい対処とは、山肌をコンクリートで覆い、地盤改良をしたことだろうと思っていた。しかし、その「正しい対処」とはそれだけではなかったとも考えるようになった。

僕の考える「正しい対処」それはコミュニケーションだ。そんなことで山が崩れるのを止めることはできないだろう。確かにそうだ。しかしこれによって救われる命を少しでも増やすことができると僕は思う。土砂災害で命を落とす原因の多くは逃げ遅れだ。避難をためらっているうちに避難できない状況になってしまい、為す術もなく流されてしまう・・・という新聞記事を読んでぞっとした。土砂災害が起きる時、多くの場合大雨が降っている。そして、どうすべきか決めあぐねているうちに道路がかん水したり停電したりしてしまったり、まさに「逃げるに逃げられない」状況に陥ってしまうだろう。もしも平家や山間部の家になれば、それはさらに致命的な事態になる。それを防いでくれるのがコミュニケーションだ。例えば誰か一人が避難する時に、近所の家のベルを押して、

「雨が激しくなる前に逃げましょう。あの山、崩れるかもしれませんよ。」

と一声かける。このつながりが、逃げ遅れをなくすと信じている。しかしこれには最近希薄化しているといわれている「ご近所付き合い」が必要不可欠だ。「命の恩人」はあいさつや世間話によって生まれるといっても過言ではない。また、身内とのコミュニケーションも大切だ。家族会議でハザードマップを広げて、

「お前、大雨が降ってる時は川沿いを通して帰ってくるんじゃないぞ。」

とか、

「テレビで避難指示を見たらすぐ逃げるのよ。」

などと話し合うことで、家族全員が無事に帰って来られる可能性はぐっと高まる。最後に、行政とのコミュニケーションの大切さを説きたい。裏山の崖が崩れかけて慌てた祖父は市役所に向かった。担当の方は、その山が土砂災害警戒地域に指定されていること、砂防設備の費用は市が一部負担してくれることなどを教えて下さったという。「自宅近くの山は大雨で崩れないか」「避難計画を教えて欲しい」そのようなことを、行政に遠慮なく相談し、「いざという時」が来る前に対処して

平成 30 年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部 優秀賞(事務次官賞)

もらうことが大切だ。家族・地域・行政とのコミュニケーションの組み合わせが、自助・共助・公助となって自分を助け、全体としての被害の最小化にもつながると思う。

この日本のどこかで今日も 5 件起こっている土砂災害。明日その被害を受けるのは自分の家かもしれない。そんな脅威がもはや「当たり前なこと」だという意識をできる限り多くの人に持ってもらいたい。そして、災害発生時の自助・共助・公助によって守るべきものを最大限守ること。そしてその教訓を次につなげること。これで、日本の土砂災害の犠牲者を少しでも減らしたい、いや、ゼロにしたい。今回の豪雨で亡くなった人たちのためにも。